
蠟梅・

芳雪うめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蠟梅・

【Nコード】

N4076K

【作者名】

芳雪うめ

【あらすじ】

江戸の長屋に住む浪人の清次郎と棒手振りの喜市。

ある日清次郎のもとに花魁の幽霊が訪ねてくるようになって・・・
安政四年から始まる、清次郎と喜市の江戸でのちよっと不思議な物語です。（以下続編シリーズ物です）

その一

夜中、戸を叩く音が静まり返った路地に響く。

しかし長屋の木戸はとうに閉まっているし、月の頃合から見て丑の刻であるから、このような時間に訪ねて来る人のいるはずもない。

神田の棟割長屋に住む浪人の清次郎は不審に思いながら布団の上で半身を起こして、腰高障子をしげしげと眺めた。

すると、煌々と照る月明かりのおかげでぼんやりと明るく浮かび上がる障子に、うっすらとにじむような影が揺らめき、それが段々と近づいているからなのか、人の形を成して濃くなっていく。

影絵遊びのようなその様を清次郎は、寝ぼけ眼をやつとのことと凝らしながらみていた。

淡く、濃くを繰り返して浮かび上がる影は、段々と眠りから頭が冴えていくにつれ不気味なものに見え始める。

ちらりと目の端にかけてあった刀が目に入った時、再び、とんとんと戸が叩かれた。

清次郎は一瞬びくりと体を跳ねさせた後、できるだけ低く、凄みをもった声で

「誰だ」

と問い掛けた。

「このような夜中に、何用か」

声を出して応答を待ってみれば、妙なこわばりから開放されたように心臓が早まるのが感じて取れ、内腑に冷や水が走るような妙な胸騒ぎが駆けていく。

「開けておくんなんし」

戸の向こうから聞こえてきたのは、妙にか細い声だった。
いよいよ不気味である。

こんな夜分に女が一人で歩くはずもなく、もしあるとするならばよほどの事情だ。

もとより夜に歩くなど危険ではあるが、世の中はこの所ずいぶんと荒れていて、この江戸も例外ではない。

夜中に切り合いがおき、朝には路地に指やら耳やらが落ちていることもあったし、こんな時世に便乗して辻斬りや強盗をはたらく者も少なくなかった。

そんな中を、果たして女が一人で歩くのだろうか。

「開けておくれなんし」

またも聞こえてきたこの口調に、清次郎ははっとした。

もしやこのくせのある喋り口調は、恐らく廓の女郎であるまいかと感じたのだ。

しかし女郎だったとして、もしそれが足抜けをして依る所を頼っているなら、やっかいなことである。

夜中に女郎がうろつくとは、多分にそういうこともありうるのだ。

ここで清次郎が戸を開け、廓に突き出せば、女郎はおそらくひどい折檻を受けるだろう。

だからと言って助ければ、自分自身ただでは済むまい。

清次郎が眉間にしわを寄せ考えこんでいると

「開けておくれなんし」

と再び声がした。

回らぬ頭で精一杯考えたが、もう年の瀬も近付いている寒々とした夜中に、女を放って置くのも可哀相な気がした。

もし相手が足抜けの女郎としても、きちんと事情を聞かぬうちは何

用も対処が取れぬ。

しかも、暗いうちに遠くまで逃げるわけでもなく、わざわざこんな長屋を選んで尋ねてくるくらいだ。

人違いをしてたずねてきているのかも知れぬとも思えた清次郎は

「待っていなさい」

と告げると、床を出て戸に手を掛け引いた。

凍った地面を跳ね返る月明かりのまぶしさに、目を瞬かせながら見ると、そこにはうつむき両の手をだらりと垂らした女が立っていた。

髪を横兵庫に結い、そこに挿された櫛は月の灯りにぺかぺかと光っている。

死に物狂いに逃げたせいで乱れたのであろう着物は金糸や銀糸が入り乱れ、まるで玉虫のように鮮やかな色をしていて、女がただの端女郎ではないことが一目で伺えた。

「一体こんな夜更けにどうなされた」

聞いたところで女はうなだれたまま何も答えない。ただ冷たい空気が土間に入り込むばかりである。

「足抜けでもしたのか？」

再び問うと、女はぼそぼそと何かをつぶやいていたが、霞のようなその声は清次郎には聞き取れなかった。

しかしよくよく見るほどにやはり奇妙である。

こんなに上等そうな花魁ならば、見世だって気づくに決まっている。しかもこの様に何の変装もしていなければ、大門の見張りがすぐさま気付くであろうし、何よりこの格好では走って逃げられもしまい。

そう考えつつ、清次郎はその見事な装いの遊女を、ぐるりとその頭の先から爪先までみた。

正しく言うならば、見たはずであった。

なぜなら遊女の脛から爪先にかけてはうっすらと透けていて、向この地べたがすっかり見えていたし、遊女の立つそこには煌煌と光る月明りを遮る筈の影すらなかったのだ。

ぐるりと見ていた目が、そのままぐるぐると回り続けるような感覚が清次郎を襲う。

血の引く音がしたようだった。

正気を失いかけて呆然としてみると、何か冷たいものがしつとりと頬を包む。

はっと顔を起こすと、それは到底人の体の温かさとは思えぬ、氷のような遊女の手であったが。

清次郎は飲み込むようにした声にならぬ悲鳴を引きつらせてへたり込んだ。

幽霊など信じてはいなかったが、この時ばかりは頭の中で経を必死に唱えていた。

しかしそんなものはものともせず、遊女は清次郎にすがりつくように寄り添い

「主が恨めしい」

と耳元で呟いた。

恐ろしく響く、じつとりと重い声に生気を吸い取られでもしたかのように、清次郎はそのまま白目を剥いて気を失い、倒れこんでしまった。

その二

周りを飛び交う声でようやく正気を取り戻した時、周りは薄明るく朝を迎えようとしていた頃だった。

戸の外に半身を出して伸びて寝ていた清次郎を、同じ長屋の住人が心配そうに覗き込んでいるのがうつすらと開けた瞼の向こうに見えた。

これから仕事に行くのだろう、法被姿で鬚をきつちりと結った大工の留造が「まかせろ」と清次郎の肩に回す様に腕を差し込んだときになって、漸く清次郎は自分の置かれている状況を飲み込んで飛び起き、ありったけの冷静さを装って

「おはよう」

と言ったのけた。

突然のことに留造が飛び退いてしりもちをつくと、向かいに住む喜市がからからと笑いながらそれを起こしてやった。

「清次郎殿は随分な寝相だねえ、夢の中はさぞかし大立ち回りされたんであろう。どれ、何人斬った」

からかうように言うと、喜市はまた口の中にかみ殺せぬ笑いを漏らしている。

「なんでえ、夢かい。だらしねえなあお侍様」

留造が尻についた砂を払いながら笑うとすかさず喜市が

「留さんだってかかあの夢見りやこうなるじゃねえか」

と留造に言葉を刺す。

おかげで恥ずかしさに赤くなる清次郎よりも、むくれる留造へと周りの者の目はむいてくれた。

昨日のことをどう言ったらいいのかわからぬ清次郎にとっては、ありがたいことだった。

説明できぬこともそうであったが、説明できたところで信じてもら

えぬかも知れぬ。

長屋の住人たちは留造を散々からかって、ひとしきり笑い転げると、すぐに朝の仕事へと散って行った。

「で、どうしたんでえ」

皆が立ち去るのを待ちかねたように、喜市は腕を組んで、袖に手を突っ込んでしゃがみ込み、まだ呆然としたままの清次郎に話しかけた。

この喜市という男は役者の様な優面の色男で、切れ長の目に柔らかな笑みをたたえ、いつもきれいに整えられた鬚はまさしく鰯背だった。

年頃が同じ清次郎に、侍と気負うこと無く気軽に話かけるが、いつもきちんと

「清次郎殿」

と呼ぶ、洒落ていながらも筋の通った男であった。

そんな多少気心の知れた喜市に問われ思わず

「昨日花魁のお化けがうちに来て」

と口走りそうになったが、冷静に考えればやはりばかげた夢に思えて来て

「なんでもない。」

と口をつぐむだけだった。

喜市は小首をかしげると微笑み

「なら良いが、月を見て寝るにはちと寒い季節だからね、気をつけとくんな」

と、よいしょと漏らして膝に手を着き立ち上がると、立ち去った。

目が冴えていくごとに、段々と昨日自分が見たものから真実味が失せていく。

あまりに現ではありえぬことで、きっと悪い夢を見たのだ。

そうでも思わねば合点のいかぬ。

言い聞かせるように清次郎は頭を振ったが、その日はぱっかりと晴れた陽の下にいても、夜中のあの花魁の手の冷たさがありありと思いい出されるばかりだった。

そしてその夜、なぜか妙に目がさえ寝付けなかった清次郎は、床に入ると僅かに漂い始める不気味さを誤魔化すように、ただ天井の木目を数えていた。

しかし、そこに行つてはならぬと思えば思うほど、意識は昨日の夜の記憶へと導かれる。

花魁のあの手の感触。

あの声。

すると段々と木目さえもが人の顔の様に見え、途中で数えるのをやめた。

しかしながらそんな自分の肝っ玉の小ささにほとほと呆れる程に、益々目は冴えるばかりだった。

するとふいに、とんとん、とまたも戸を叩く音が響く。

清次郎は全身をびくりと震わせた。

夢ではなかったのだと思うよりも早く、足の先から素早くざわざわと鳥肌がのぼってきた。

それなのに汗をかきながらも目をぐつつむって、ただひたすらに経を唱えた。

昨日よりもはっきりとした頭が、得体の知れぬ気配をひしひしと感じている。

とんとん、という音は清次郎の経など全くお構いなしのようで、規

則正しく戸口から聞こえて来た。

その三

しかし、しばらくすると戸を叩く音が止んだ。

清次郎はふーっと息を吐き、既に玉の様に浮かび上がっていた額の汗を拭った。

そうして落ち着いた心持ちで瞼を持ち上げると、布団の横であの花魁が座って自分を覗きこんでいた。

脇に張り出した鬢からはらりと落ちた髪束が、瞼の直ぐ上で揺れる。

「主様、何故入れてくれぬ。お恨み申しますぞ」

と花魁が言うが早いのか、清次郎は床を飛び跳ねる様に抜けだし、足をもつれさせ命からがら戸口へ向かい、そのまま戸を蹴破って外へと出た。

あまりの音に、一つ屋根の下の長屋の住人も夜中と言えど目を覚まし外に出てきた。

何事かと音のするほうを見てみれば、そこには寝間着のままの清次郎が、倒れた戸の上に四つん這いで放心している。

顔を半紙のように蒼白にし、寒空の下だと言うのにだらだらと冷や汗をかくさまは異様で、皆が口々に

「大丈夫かお侍様」

と声をかけた。

しかし動悸のせいで口の聞けぬ清次郎は、やっこのことどうなづくと何度か呼吸を繰り返して漸く

「寝ぼけてしまった、申し訳ない」

とおぼつかない声で謝り倒した。

長屋の者はみな呆れ返った顔で「心配させやがって」「驚かせるな」

等と文句を口にしながらぞろぞろと戻って行った。

呼吸が落ち着いたところで、動悸はいまだに激しく胸に響いて、手足にもさっぱり力が入らない。

っそれでもおそろおそろ部屋を振り返り見やると、そこにはもう何もおらず、がらんとした部屋の中に、ただ月光が差し込んでいた。けだった。

ほうつと息を吐き、肩を落とすやいなや、がらりと向かいの長屋の戸が開く。

清次郎が引き付けを起こしたような声を上げ、驚いて肩をすくめると、喜市は一瞬呆気にとられ、戸板の上に乗ったままの清次郎を見て、すぐにげらげらと笑い声を上げた。

「清次郎殿、柔術の練習であれば戸板相手に一人でせずともお相手いたすぞ」

茶化すようなその物言いに、思わず清次郎は声を荒げる。

今さっきの出来事に出くわせば、誰だって尋常ではなくなるはずだ。

「笑い事ではござらん」

毛羽立った清次郎の声にも、喜市はお構いなしのようにけらけらと笑うと、清次郎の前にしゃがみこんで、掻い巻きについた泥を掃ってやった。

「で、朝といい今といい、どうしちまったんだい」

清次郎は一瞬口ごもったが、とうとう藁にも縋る思いで打ち明けた。茶化すこの男が信じるかどうかよりも吐き出すことで安心をしたかったのだ。

「化け物が来るのだ。俺を恨んでいるらしいが心当たりが無いのだよ」

話があまりに突拍子も無いので、からかわれているのかと喜一は首をひねったが、もう口に出すことすら恐ろしいという様子で神妙に

話す清次郎を見て、確かに尋常でないと感じた。
何より、からかわれても、からかうことができぬほどの真面目な男である。

「昨日も来た、今日も来た。きっと明日も来る。」

「へえ、どんな化け物だい」

今度は口の端を上げることすらせずに、じっと問いかける喜市に、
漸く清次郎の鼓動も落ち着きを取り戻し始めた。

「花魁の幽霊だ」

その四

喜市は一瞬驚いた様な顔をして

「そりゃいいや。初回、裏って済んだら次は床入りだな。幽霊の花魁なんぞ、吉原でいくら積んでもお相手頂けないぞ」

と、さっきまでの難しい顔を途端に崩して、清次郎の肩を叩きけらけらと笑い飛ばした。

「わらいごとじゃない」

またも声を荒げる清次郎に、どこかの家から「うるせえ」と野次が飛ぶ。

むうと口をへの字に曲げる清次郎の顔を困ったように眺めると、喜市は呆れたようにため息を吐いた。

「笑わなきゃ怖いままだろ。なあに、ちゃんと心当たりがねえ、人違いだって話してお引き取り願うしかねえや。幽霊だって別人うらみ殺して地獄に行くくんじゃ、悔やみきれんだろうよ」

「話す。幽霊とか」

「おうよ」

大胆な提案に呆氣にとられ、清次郎は目を丸くした。

話してわかるような幽霊の勘違いならば、二度も間違えて自分のところに化けて出るわけもあるまい。

しかし、善は急げとばかりにその日再び日が暮れると、喜市は清次郎がいくら懇願しても

「起きているから呼びにきたらしい」

と言って、一緒に花魁を待ってはくれなかった。

さては楽しんでやがると思うと、悔しくて、それでもやはり幽霊はおっかなくて、結局は喜市から気休めにもらったお守りと、酒で清めた刀をかたわらに置き、怯えきった心を塗り槍に飲み込むと、

どっしりと坐してその時を待っていた。

夜はすっかり更け、あまりの静けさに大通りで誰かの歩く足音さえ聞こえる。

路地を抜ける風の音が思い出したように届き、月の明かりの差し込む音がしんと聞こえそうなか、微かな風に戸が揺れた。

がたりと鳴る戸の、音の合間から、微かに何かが戸板にぶつかる規則正しい音がする。

「やっときたか」

清次郎はいよいよお守りをぐっと握り締め、ごくりと息を飲み込むと。

「今参る」

と、出来るだけ低く唸らせた声で、震える足を戸口へと踏み出した。心の臓が口から出てきそうであった。いや心の臓どころか、内腑がすべてひっくり返ってはみ出てきそうである。

清次郎はそれらを納めるように息を呑み、覚悟を決め思い切りよく戸を開け放った。

その五

その瞬間目の前に現れたのは、目をまん丸に見開いた喜市であった。余りに勢い欲開いた戸に驚いた顔のまま、清次郎の妙に睨みの聞いた顔と見合うと、喜市はげらげらと吹き出した。

退かぬ笑いに喜市は申し訳なさそうに眉を下げながらも、喜市は手にした徳利と猪口をひよいと持ち上げて見せた。

「いやあね、酒でも飲んだらちよいと肝も座るかと思つてね。飲み過ぎて寝ちまうといけないからこれだけだがな」

まだ強張りのおさまらぬ清次郎にそう告げると、押し付けるように清次郎に渡し、「何かあったら呼んでくれ」と念押しした後、僅かに肩を震わせながらもすぐに踵を返し

「その時は、戸を優しく開けてくれよ」
と、後ろ手を振って付け加えた。

さすがにそれには清次郎も笑いを漏らしてしまつて、喜市はそれに気づかずに部屋へと戻ってしまったが、一笑いしたせい、戸を閉めて部屋が暗くなつても心持ちが随分と軽くなつていた。

「小意地は悪いが、良い奴だ」

欠けた猪口に笑みを落とし、部屋に上がろうと振り返つたその時、暗い部屋の中だけれど、確かに部屋の中で誰かと目が合った。

瞬きをした一瞬に浮かびだした鮮やかすぎる着物は、暗闇の中でお目を惹いた。

さながら宵闇に浮かぶ牡丹のようで、透ける白さのその腕は白鷺の

ように見える。

間違はなく、あの花魁だった。

知らぬ間にその場にへたり込んでしまった清次郎を目掛け、花魁はゆっくりと音も無く、滑るように足元へと近付いて来る。

先ほどまでの心持はすっかりとどこかに去ってしまい、叫んで逃げ出したい気持ちではあったが、自分の後ろにある戸の向こうには喜市がいてくれると思うと、昨日よりはよっぽど心強かった。

清次郎は目に入った銚子の酒をそのままぐっと飲み干し、お守りを握り締め立ち上がった。

「花魁、待たれよ。私はお主のことなど存ぜぬ。恨まれる筋合いなど到底ござらん。人違いではあるまいか。」

と上ずりはするものの、腹のそこから力を込めて言い放った。手や足はそれでも小刻みに震えていたが、頭の中は自分でも感心するくらいに至って冷静であった。

途端にぴたりと歩みを止めた花魁の、彼岸花の花弁のような、紅を引いた薄い唇が僅かに動く。

不思議と、恐ろしいと言うより先に、美しいと思えるほどのやさしさであった。

「嘘を申しんすな。わっちだけだと申して水揚げしたのは、どのどいつじゃ。」

わっちがありながら、どこぞの者とも分からぬ女を連れ込んだのはどいつじゃ」

静かだが、何より大きく深く響くような、悲しく恐ろしい声なのに、薄い壁を隔てた隣の家からはこうこうと下駄売りの佐助のいびきが変わりなく聞こえてくる。

空気がきしんでいるようで、あちこちで何かのはじける大きな音もしたが、それでも清次郎以外の誰かがこの音に気づいている様子はなかった。

目を一層吊り上げた花魁はまたもするすると近付いて来る。

「待て、よくよく見てくれ、こんなボロの長屋住まいの俺に、どうしてお主のような花魁を揚げる甲斐性があるう。」

恐ろしくてしょうがなかったが、搾り出すように声をあげながらも傍らにあった米櫃を傾けて中を見せた。

「見てみる、明日食う米がたったの八粒だ。」

自分で口にしていながら、情けなくてしょうがなかったが、とにかく花魁を追い返すことで精一杯であった。

すると漸くその足はぴたりと止まり、今度はぐるりと部屋を見渡し始めた。

月明りで僅かに明るい部屋の中、清次郎は手をぎゅっと握り締め、緊張と恐怖を耐えていた。

花魁はぺたぺたと部屋にある物をひとしきり触りながら歩き、しばらく考え込む様子を見せた後、再び花卉のような口を開いた。

「お主は誰でありんすか」

先ほどとは打って変わって、花魁は困ったような不安であるような顔をしている。

ほんのりと生気を帯びたようにさえ見えた。とたんに張り詰めた空気が緩むのがわかると、緊張と恐ろしさで上がりきった肩が、一気にすっと落ちた。

「私はは狩野清次郎と申す。訳あってこのような長屋に住んでいるが、白河藩の出の御家人でござる、問うが、お主は一体誰をそんな

に恨んでいるのだ。」

恐ろしくないとさえ言うようになるが、白い手で胸元をぎゅっと握り締める花魁を見ると、それよりも心配の方が勝ってしまった。

「宇部征之助と申す男じゃ。商家の若旦那でありんす。」

その六

清次郎の部屋を後にして半刻程経ったであろうか。

一向に助けを求められる様子も無いので、喜市はあくびを何度もちながら朱塗りに鯉の彫られた細い煙管をぷかぷかと吹かしていたが、やはりあれは清次郎の夢の中の出来事だったのだろうか、などと考えるうちに襲いくる睡魔にうとうとと瞼が落ち始めていた。

「喜市殿。よろしいか。」

突然戸口から聞こえた声に、瞼が跳ね上がる。

それは間違いなく清次郎の声であったが、想像していたよりもずっとしっかりとした声であったので、喜市は先ほど浮かんだ自分の考えが当たったのだと心なしかほっとした。

「はいよ。」

立ち上がり、その戸をひいた向こうに広がる染み透るような静けさと月の光の中、清次郎はちゃんと立ち、先ほど見た怯えた顔とはまるで別人のようであった。

「どうしたんでえ。そんな怖い顔をして。花魁の誤解はとけたのかい。」

「ああ。もう大丈夫だ。」

その時、喜市は頭を下げる清次郎の後ろにぼんやりとした何かが見えたような気がした。

はっとして目を凝らしたが、清次郎はすぐに頭を上げ話だしてしまつたので、それがなんだつたのかははっきりとしなかった。

「ところで宇部征之助という男を存ぜぬか。お主は顔が広い。少しの心当たりでも良い。良かったら教えて頂きたい。」

喜市の眉間に寄ったしわにも気づかずに、清次郎は少し困った面持ちで話します。

「すまねえ清次郎殿、何の話かわからねえ。何でそいつの名前が出てくるんで」

「花魁が恨んでるのは、その男だそうなのだ。細かいことはご当人に直接聞いた方が早かろう」

清次郎が体を半身横にずらしたことで見えた光景に、喜市は持っていた煙管をぼとりと足下に落としていた。

そこには月明かりよりも蒼白で、艶やかな花魁が立っていたのだ。

現だと信じられぬままに招き入れた喜市の部屋で、花魁は清次郎の隣にまるで百合の花のようにしっとりと座っていた。

幽霊とご相談とは何ておかしな図だろうと、喜市はもしや自分こそが夢を見ているんじゃないかと疑っていた。

「しかし幽霊も迷子になるんだねえ」

清次郎が言うには、花魁は、宇部何とかの家のある、松の木の生えた何とか小路を、ただ松の木が見えたというだけでここだと思ったようだった。

あまりに乱暴な間違え方である。

「このあたりのどこだか分からなかったゆえ、片っ端から化けて出てみたのだが、そうして濃紫殿の姿が見えたのは俺だけだったらしいのだ」

話すごとに清次郎の目は段々と生気を帯び、使命感に溢れるようである。

喜市はそんな清次郎を見て、さては取り憑かれたんではあるまいかと不安にかられた。

「ふうん。花魁殿、あんた濃紫って名前か。」

「へえ。」

濃紫はにこりもしない。

それどころか目の端で、手につまんだものを見るように視線をくれるので、喜市はそれだけでもう気に入らない気分になっていた。

「それなら明日にでも、最近身請けされた濃紫って花魁がいねえか聞いてくらあ。

宇部何とかの事も直ぐにわかるだろう。そしたら余所いっとくれ。

清次郎殿が迷惑だ。」

喜市が煙管を手にとると

「征之助じゃ」

と花魁はつんと、斜め上に顎を持ち上げ言った。

喜市は少しむっとした様子で

「ともかく今日は帰ってくれ。あんたのお陰で俺も清次郎殿も眠くてならねえ」

とかじるように煙管を加えた。

本当のところは、清次郎は二の次で、眠いわいけすかねえわで喜市自身が早くこの状況を御免被りたかったのである。

この際これが夢だろうが現だろうがどうでもいいのだ。

花魁はそれを感じてかどうだかは知れなかったが、すっと立つと

「また今夜、引け二つの頃まいりんす」

と喜市に一瞥をくれて、ふっと消えた。

その七

「これだから吉原の花魁は気ぐらいばかり高くてならねえ」
煙管をくわえたまま、褪せた畳にごろんと横になると、横に投げ出したままだった掻い巻きを空いた手で引き寄せて清次郎に背を向けた。

「濃紫殿の件、よろしく頼む」

ちらりと振り返れば、頭を下げて見せている清次郎のお人好しっぷりと、先ほどの花魁の態度にイライラして、喜市はかしかと煙管の吸い口を噛んでいた。

「清次郎殿よ。アンタは人殺しをするつもりか」
遠くで鳴く野良犬の声が沈黙を縫って聞こえる。

きょんとした目で、意味を捉えられぬままにいる清次郎に、喜市は深く溜め息を付きながら、煙草盆の淵に煙管の先をちゃんと打ち付けると珍しく声を荒げた。

「あの女郎に宇部何とやらを呪い殺させる気か。
ぼんやりもいい加減にしやがれと言ってるんだ」

事実、花魁は恨めしさの余りこの世で彷徨っているのだ。

女の情念の高ぶりなら、殺したとておかしくは無い。

「その様なつもりは毛頭ござらん。ただ、毎日芯から震え上がるほど脅かして差し上げるのだ。」

声の勢いに驚いてか、目を真ん丸くさせた清次郎が慌てて口にしたが、喜市は煙管をかみつ

「途中で殺したくなっちまったらどうするんだい」
とたずねた。

するとすぐさま清次郎は真直ぐな目で

「その時は成仏願う。」

濃紫殿にも、居場所を探すかわりにと、聞き入れてもらった。

ただそれでも、俺の目の無いところではどうなるか分からぬ。」

「殺すんじゃないんなら、一体何をするって言うんだい。脅かすくらいで気が済むものか」

「そうじゃない。せめて濃紫殿に心からわびるように、毎日濃紫殿を思い出さずにはいられなくするのだよ。濃紫殿にした仕打ちを悔いるようになる。」

「もしまかり間違って殺すようなことがあったらどうするんだい」

「そのことも考えて明日から念仏を上げてもらおうよう坊様に頼みに行く。」

余計な力は持たせぬように計らう。

しかし、それまでは宇部の家にお払いなどが入らぬ様に見はらねばならぬ。」

すらすらと出てくる考えと、余りに真面目である清次郎に、喜市は少しほっとして眉を下げた。

「念仏なんか効くのかね」

「それが、濃紫殿は坊様に書いて貰った札を置いた私の文机だけではどうしてか触れられなかったそうなのだ。」

「それじゃあ、後は俺がその宇部なんとやらを探せばいいのだな」
ため息をつきつつのそりと体を起こして向き合って座ってみれば、
清次郎は困惑した面持ちでこちらをみつめ

「ご主人の名は征之助殿でござるぞ。」

と真面目に言い放つので、喜市は一瞬沈黙した後吹き出してしまった。

そうだ、この様な真面目とお人好しが服を来て歩く男に、人を殺す手助けをするなどありえない。

自分の早とちりだったと思うと喜市は、しっかりしなければいけない

いのは自分だと思えた。

その日、夜が明け長屋の木戸が開くとすぐ、喜市はどこかへ出かけたようだった。

清次郎も、坊主を訪ねるため、支度を済ませると朝飯替わりに沢庵をかじり、部屋を出た。

外は藍とも薄鼠ともつかぬ空が高い所に張り付き、そこにはまだちかちかと星が幾つか取り残されている。

空っ風が落ち葉とともに駆け抜け、清次郎が思わず首をすくめるほどに寒さが強い。

襟元に巻いた布をぎゅっとかき集め、清次郎は本所の外れ、小梅村の近くで田んぼに囲まれている遵恵寺という寺を目指していた足を速めた。

その寺の坊主とは、清次郎が江戸に来てすぐに行き倒れになったのを拾って世話をしてくれ、以来色々と懇意にもらっている縁があるのだ。

清次郎のかじる沢庵もここの産物である。

たずねてみれば、事情を合点した坊主は一つの文句もなく快く引き受けてくれた。

濃紫という名前と、形代がわりに清次郎が描いた似顔絵を坊主に託し、念仏をあげてもらったことになったのだが、この似顔絵は清次郎が筆を走らせたものであった。

清次郎は浪人同然の暮らしぶりで、暇をもて遊ぶうちに手先ばかりが器用になっていたおかげで、自然と似顔絵などは朝飯前の腕前になっていた。形代には十分である。

ひとしきり礼を言った帰りがけ、坊主から握り飯や味噌、沢庵をも

らうと、清次郎は喜市の知らせを待ったため、もうすっかりと明るくなつた家路を急いだ。

途中、両国のあたりに差し掛かった時であつた。

「清次郎殿」

と呼び止める声がある。

いつものように笑みを浮かべては両腕を組み、手を袖の中に入れ悠々と歩いている男が袖から手をついと出して振る。

しかし喜市は清次郎の近くに寄ると、顔をしかめて仰ぐように手をひらひらと振った。

「清次郎殿。何を食つたらこんな臭いのがでるのだ」

清次郎は、はて、と首を傾げたが直ぐさま思い当たつた沢庵の包みを袂から取り出した。

「誤解するな、この沢庵であろう」

「一体何をしに行かれたのだ」

「違う。これはお願いに上がった寺の坊主にもらつたのだ。

何しろ絶品であるぞ、貴公も食べてみるがよい」

慌てて弁解をする清次郎に、喜市は今度は堪え切れぬと言わんばかりにげらげらと笑つた。

「そうかそうか。こちらにも収穫があつたよ。

宇部つてえのは深川の材木問屋だよ。結構な大店だ。

「どうだろう、ここからそう遠くも無いし、今から見に行かないかい」
「そういうと二人は連れ立ち、溶け始めて緩くなつた地面を踏みしめ、宇部家へ向かうことにした。

「そうだ、喜市殿。」

清次郎は思い付いた様に顔を歪めて懐からお守りを取り出す。
握り締めたためか、しわくちゃんになつたそれを差し出すと

「お主がくれたこの守り、水天宮は安産の守りだと坊主に笑われたぞ。」

道理で効かぬわけだ。」

と、怒るでもなく困ったように顔をしかめる清次郎に、喜市は再び吹き出してしまった。

その八

昼過ぎに深川につくと、探す間もなく二人はすぐに立派な松の木の生えた通りで、一際大きな商家に出くわした。

相模屋と立派な文字が書かれた看板が、屋根の上にどっしりと構えている。

がやがやと大勢の人足や丁稚がひっきりなしに出入りしている、間口も広く立派な店で、かなり裕福な問屋である事が容易に伺えた。下足番がせわしなく整理をしているのは、人足用の下足だろうか。

「流石、花魁を身請けするだけあらあ。どうしてこんな立派な家とぼろ長屋を間違えたんだか不思議で仕方ねえや」

喜市は感心して漏らすと、きよろきよろと辺りを見回して直ぐ、材木問屋の通り向かいにある蕎麦屋を指差した。

「清次郎殿、腹掬えをしよう。効かぬ守りを渡した詫びだ」

清次郎は断ったが、喜市は「よい、よい」といって半ば強引に蕎麦屋へと連れて行った。

入ってみれば、昼前にも関わらずに埃っぽい男達で座敷はほとんど一杯であった。

おそらく彼らの中の幾人かは、相模屋で働いているだろう。

喜市は掛け蕎麦を二つ頼むと、ほんの僅か空いていた座敷にねじ込むように座り、隣りに座ってそばをすすっていた人足であろう男に話しかけた。

「向かいの材木屋は随分でっかいねえ。アンタ、あすこに出入りしたことはあるかい。」

掛けそばをすすって鼻先についた汁を、かすれた色の袖で拭いながら、いかつい顔をした男は口の中をもごもごとさせながらうなずい

た。

「ああ、ここいらじゃ有名だよ。先代が去年死んでからは、息子の若旦那が上手く切り盛りしてらあ。お蔭様でこっちはくいっぱぐれずに年を越せそうだよ。」

そばを飲み込むと、その顔からは想像できなかった気楽な口調で男が箸を振る。

跳んだ汁を再びその袖で拭くと、男はへへへとがんものような顔で笑った。

「へえ、やり手なんだねえ。ところで奥方や子供はいらっしゃるんだろうか」

しかし、続いて投げかけられた問いかけにふと笑顔を曇らせると、今度は不審気に顔をしかめ始めた。どっちにしろがんもに変わりはない。

「なんでそんな事聞きたがるんで」

声を低くした男が聞き返すと、喜市は頭をかいて

「いやあね、この相方と商売始めようと思ってね。今日はここらへんを調べて歩いてたのさ。」

そしたらまあ立派な大店があるじゃねえか。早速ご挨拶に伺いたいのだがね、まずは手土産何ぞで奥方様のご機嫌取れりゃあ万事上手くいくってなもんでね。」

立板に水のごとく、憶せず作り話を繰り出す喜市に清次郎はただ感心しきりだった。

男はそれがすっかり本当の話だと思ったらしく、がははと笑うと傍らの楊枝を取り出して啜えた。

「そりゃあ確かに。かかあが怖いのは金持ちも人足もかわらねえかな。」

でも、あそこの奥方は安い手土産じゃ効かねえぜ。なんせ花魁だったからな。しかも昼三ときたもんだ。」

そこに突然、掛け蕎麦を持ってきた女将が口をはさんだ。

「でも、最近めっきりみやしないよ。

噂じゃ死んじまったか出てっちまったんじゃないかって言われてるさ。まあ元より悪所の女に堅気の商家の御内儀なんぞ務まるはずもないのさ。死んだにしても逃げたにしても、若旦那も高い買い物をしたもんだよ。」

喜市は女将の話に大袈裟に感心して相槌を打っている。

「やっぱりおかみさんみたいなしっかりもんがいてこそお店は盛り立っつてもんだよなあ。しかし、せっかく惚れて揚げた女がそれじゃあ、若旦那も大層気を落とされているなあ。」

すると女将は喜市と清次郎、そしてがんもの男のそばに顔をついと寄せると含むような笑いを浮かべ

「それがそうでもなさそうだ。」

と話始めた。

その九

噂好きの女将の話によると、若旦那は確かに気落ちしている様子を見せるのだそうだが、どういうわけか最近頻繁に若い娘が若旦那に面会に来ているという。

時には母か侍女と思しき老いた女を連れ立ち、日によっては泊まることもある。

事情が事情なだけに、誰も口に出して聞けずにはいたが、周りではみんなこれが後添えになるものと思っているようだった。

この娘というのが濃紫が言っていた女だろうと二人は確信を持った。二日とあけずに母子は相模屋に来るというので、その日は暮れるまで張り込んでみたが、ついぞその娘は現れなかった。

時折、女将に「あれが若旦那だ」と教えてもらった、小洒落た身なりの、だがきりりとした面構えの男が通りに出てはにこにことして客や人足を見送っている。

大店の若旦那でありながら近所の人間が度々親しげに男に話しかけ、男も楽しげに話していた。

どこぞの子供達が近くで戯れるのを目を細めて眺め、子供たちの飛ばした鞠がぶつかって落ちた椿の花びらを拾いあげると、その薔を労わる様になでていた。

二人はそれを眺めながら何かを話すこともなかったが、どうやら考えていることは同じだったようで、視線を合わせるとどちらともなくうなずいて、岐路につくことにした。

「清次郎殿、花魁に教えるか？」

喜市は襟元にまいた布に口元をうずめ口にしつつも、何かが頭の中

で引っかかっているようで、もう群青になった空をじっと見ていた。高いところでもう星がちかちかと光りはじめ、傍らを乾いた藁が風に流されてかさかさと転げてくる。

清次郎も先ほどから、むう、と眉間にしわを寄せたまま考え込む一方だ。

「あれが若旦那であれば、何だかとてもそんな事をしそうな方には見えないんだがなあ」

と言う喜市の言葉にかぶせ

「ああ、全くもって同感なのだ。はたしてただ外面が良いだけなのだろうか。あの女将さんも若旦那にはこれと言って悪評もないと申していたしな」

と言うとまたもや、むう、と黙り込んでしまった。

結論は出ないままであったが、まだ原因の娘を見る事がかなわなかったこともあったので、今日のところは花魁には教えないでおくことにしよう、と決めた。

その夜、約束通りの時間にどこからともなく濃紫はどこからともなく現れた。

しかし、昼間のようにしれっと喜市が

「明日に必ず全て分かる手筈である」

と伝えると、がっかりした様子ではあったが

「わかりんした」

と承知してくれた。

清次郎殿は嘘が下手だから、と請け負ってくれた喜市に感謝しながら、清次郎は濃紫に向き直り、すまなかったと深々謝るとどこで摘んだのやら、花が三つほど咲いた蠟梅の小枝を袖から出し濃紫の隣りにかざすように差し出し、見比べるように交互に目をやると、ふっと笑みをこぼした。

「綺麗だと思ったのだが、流石に花魁にはかなわぬな。しかし、よい香りだぞ。」

ついと目の前に差し出された小枝に、濃紫は驚いたような顔をしたが、すぐに弱弱しく口許を緩ませ、白い手を蠟梅に伸ばした。しかしその手を蠟梅はするりと擦り抜けてしまう。

悲しげにほほ笑む濃紫に、清次郎はしまった、と蠟梅をつかむ手をぐっと握ったが、しかし濃紫は再び蠟梅の花弁に触れるように両の手を近づけ、守るように包むとしつとりと囁いた。

「もしわっちの墓がわかりんしたら、いつかその蠟梅、手向けてくれぬじゃろか。」

余りに寂しそうなその微笑みは、さながら凍った空に張り付く月のようだった。

清次郎は蠟梅を傍らに在った猪口に挿し濃紫の前に置くと

「承知した。約束しよう。」

と、うなづいた。

あまりに真摯な光を宿すその目に濃紫が何を感じたのかは知れなかったが、微笑みに温もりを戻したようにみせるとそのまましばらく蠟梅を見つめ

「また明日参る」

と夜の闇に溶け込むように消えた。

その十

「何で濃紫があんたを旦那ではないと気づかなかったか分かったよ」
何を今更、という感じで清次郎は首をかしげていたが、喜市には、
あの時引っかかっていた不思議な感覚のわけが分かっていた。

微笑んで花魁を見送る清次郎の目に、そのきっかけがあったのだ。
「濃紫は恨みと、ほんの少しの曖昧な記憶しか持っていないようだが、あんたは若旦那にちくと似てやがんだな。」

益々不思議そうな顔をした中に少しの赤みを浮かべながらも清次郎は「そうかな」と頬をさすっている。

喜市はそれを僅かに苦々しく笑ってみせると、蠟梅の入った猪口をひょいと持ち上げた。

「俺はあんたが同じような顔して子供らと遊んでんのを見たよ。隣の吉婆の愚痴をにこにこ聞いているのもあんたくらいだし、どん詰まりに生えた椿に添え木したのもあんただろ。」

まあ、面相の作りの良し悪しは別としてな。

つまりは濃紫がどんな若旦那をみてたかってことだな。」

隙間からひゅうと吹き込む冷たい風が、蠟梅の香りを喜市の鼻先へと舞い上げる。

「清次郎殿、どうだろう。いっそご本人に会ってみては。」

くん、と鼻をひくつかせながら喜市は微笑んだ。

翌日の昼、二人は両国の近くの茶屋で向き合っていた。

清次郎はいつもと変わらぬ様子であるが、喜市の方は風体が違っている。

座した脇に置いた大きな木箱とのぼりを背負えば、すっかり行商の体であった。

心配そうに眉を下げ

「バレやしないかね。」

と気弱に清次郎が呟くと喜市は笑いながら

「なに、ここに来るまで、あんたより商売の数はこなしてらあ。

化粧水（けわいみず））なんぞ売った事は無いが、伺うにはこれが一番いいだろうよ。」

それより清次郎殿は坊主のところに行って読経をやめてもらってくれ」

というに加えていた煙管を煙草盆にこんと打ち付けて灰を落とした。そうして、よいしょと木箱を背負うと

「また夜に、長屋で」

と、件の材木問屋へと出かけていった。

残された清次郎は、ため息を一つつくと、茶をすすった。

一体何故喜市は「もう読経は必要ないかも知れない」といったのだろう。

考えてみてもわからずに、ただ夜が待ち遠しくなるばかりで、どうしようもない焦りをぶつけるように残った茶を一気に飲み干すと、茶屋を後にし足早に本所へと向かった。

一方材木問屋の前で、喜市は木箱をしょいなおす。

「ごめんくださいまし。ご主人はいらっしゃいますようか。」

暖簾をちらりと上げて顔を覗かせれば、中にいた四十半ばだろうが、年季の入った番頭の顔が見える。

目が合ってふと笑えば、訝しげな顔で返す番頭に暗黙のうちに追いつ返そうとされているのが知れた。

「何ぞ御用でしょうか」

と、直ぐ後ろから例の若旦那が顔を出した。

梅幸茶の着物をしなやかに身にまとい、近くで見ると益々凛々しくも優しげな、良い男であった。

番頭のしかめっ面を横に置くと、一層その穏やかさが引き立つ。

いきなり現れた張本人に一瞬息を飲んだが、喜市はにこりと笑うと被りの手ぬぐいを取り言った。

「こちらに綺麗な奥方がいらっしやると聞きましたね。椿の朝露を集めた化粧水（けわいみず）にございますが、いかがでしょう。ご婦人方には大変評判が良いものにございます。一つ、奥方にいかがと。」

番頭は、はっとした顔を見せ、若旦那を振り返った。

受け止めるようにうなずいた若旦那は、悲しそうに顔を緩めて笑い「そうですね、一つ頂きましょうか。」

と、番頭の横に腰を下ろした。

番頭に顎先で招かれるままに奥に入ると喜市も木箱を下ろしてしゃがみ、いよいよの言葉を息を一つ飲み込んでから言った。

「奥方は今いらっしゃいますか。実際に見ていただいては」

心のうちに緊張を走らせながら返答を待てば、若旦那はためらう様子一つ見せずに言葉を紡ぎだす。

「そうでしたら、いいんですがねえ」

そう言った後の若旦那は先ほどよりも輪をかけて寂しそうで、痛々しそうに見つめる番頭の顔からも、この奥方が如何に大事にされていたかという空気がひしひしと感じて取れた。

その十一

坊主に引き止められ、話の相手をした清次郎が帰ったのは、小紫の訪れる約束の半刻ほど前であった。

ぴゅうぴゅうと長屋の間を吹きぬける中、喜市の家からはもう臙に暖かそうな明かりが漏れていて、清次郎は戸の前で声をかけようと立ち止まったが、どうやら来客中らしく中から幾人かの話し声が聞こえたので、珍しいものだなあと気にはかかったがとり合えずとそのまま自分の家へと戻った。

坊主から貰った土産の袋を狭く底冷えのする土間にどさりと置くと、畳に腰を下ろして行燈に火を入れた。

猪口の蠟梅は、淡い行灯の明かりにぼうつと柔らかく浮かび上がり、どこからか入る隙間風に灯りがゆらぐ度にまるで今咲き出でたような凜とした美しさを持っていた。

思わず見とれた。ふと、濃紫の姿が浮かんだことが何だかこそばゆくて、思わず頭（かぶり）を振って打ち消す。

「よう戻りなんした」

ふいに背後から掛けられた声は、今さっき自分の中から追い出したその女のものだった。

振り向けば、なんだやはりそうだ、と思うほどに美しく淡い光の中に浮かび上がる姿は、蠟梅に引けをとらぬものである。

「予定より早いお出ましたな。」

知れるはずがないとわかっていても、自分が至った考えがむずがゆく心を乱すので、清次郎は短くそういうと視線をすぐさま蠟梅へと逃がしてしまった。

「心がどうにも騒いで待ちきれず、つつい出てしてしまいんした」

知ってかしらずか、濃紫は少し進み出ると清次郎が視線を向ける蠟梅の直ぐ横にゆったりと腰を下ろした。

盗み見るように蠟梅から濃紫に視線を流せば、その顔には今までにないはにかむ様な笑みが浮かんでいた。

まるで、春を待ちわびるような、季節を慈しむようなその深い目の穏やかさに、清次郎は恨みの情をついぞ見つけることはできなかった。

「万事は喜市殿が承知しているはずだ。今しばらくここで待たれよ。心配ならいない。」

濃紫は弱くうなずくと、先ほどまで清次郎がしていたのと同じように、傍らの蠟梅を見つめた。

しばらく、話すこともない二人の間を吹き込む隙間風ばかりが音を立てる。

流れる雲が月をかすめるたびに薄暗くなる部屋に、濃紫は消え入りそうに儚げだった。

「清次郎殿。」

空気をくもの糸で縫うように静かにつむがれた言葉が漏れる。

「わっちは、確かに、主人を恨んではありますが、わっちは主人を愛しておりんした。」

それなのに、何故清次郎殿と間違えたのかずっと考えておりんした」
そう言うとき小紫は蠟梅の花を眺め微笑んだ。

「最初は、ようく笑うところが、似ているのだと。でも、そうではありんせん。わっちは知りんせん。」

清次郎は、そう話す濃紫の目が悲しくも温かく緩むのを見て、ほのかに寂しさを感じる自分に気づいていた。

「何をだ。」

「こんなに恨んでいる人なのに、わっちはあの人の怒った顔も、冷たい顔も覚えておりんせん。」

わっちはあの人が、暖かい笑顔と優しい目をしていたことしか覚えておりません。」

そう言って、ふと目を瞑った濃紫は記憶の手綱を引き寄せているのだろう。

口の端を微かに上げると、その双眸からはまっすぐに涙が伝い落ちた。

火鉢を置いてもお部屋を凍て付かせる冬の空気に変わりは無かったが、濃紫の柔らかな笑顔は、まるで雪解けの陽のようであった。

「政之助殿は、濃紫殿の前ではいつもそのような穏やかな顔しか、しなかったのだな。」

誰に言うでもなく呟いた言葉に、濃紫は小さく頷いて蛾のような指で自らのなみだを拭った。

「だからもう、良い。愛した男が、いつも優しい眼差しを注いでくれる事の、何と尊いことか。わっちは十二分に、暖かいものをもらいんした。それだけはまことのことじゃ。」

それで、よい。だから、あの方にはどうぞ幸せになっておくれなんと、伝えて欲しいのじゃ。」

濃紫はそういうと「しかし、成仏というのはどうするものかなあ」とおどけて笑った。

その時、突然戸口から声がした。

「もし、清次郎殿、失礼するぞ」

喜市の声だった。

その十一（後書き）

お付き合いいただきました方がいらっしやいましたら、誠にありがとうございます。

次話、最終話になります。

その十二

「ああ、丁度きているよ。」

土間に降りて腰高障子をひけば、そこには妙に生氣に満ちた喜市に顔があった。

おそらく相模屋が見つかったと言う朗報を引っさげていると思ったのだろう、ふと濃紫に目をやれば、申し訳なさそうに眉尻を下げて首をかしげている。

「なんだ、もう来てたのか。そりゃよかった。早速で悪いんだが」

「喜市殿、万事もう良くなった。濃紫殿はもう政之助殿を恨んではおられぬようだ。」

喜市が言い切らぬうちに、清次郎はまるで遮るように急いて事情を口にした。

「ほう、なんでまた。まあ丁度良い、会わせたい人がいるんだよ。」

一瞬、言葉を引っ込め、驚いたような顔を見せたものの、喜市の顔は一つも陰る事がなかった。

それどころか一層顔を穏やかにして後ろを振り向き「どうぞ、入ってください。」と、誰かに促していた。

狭い土間に体をねじ込むように入ってきたのは、硬い面持ちの年の頃十八ほどの女と、その母であろう白髪交じりの女だった。

寒いのか、それとも緊張しているのか、若い女は両の手を前でぐっと握り締めている。

清次郎はどきりとした。

間違いない、これが例の浮気の相手だ、と確信した。

喜市の得意面の正体は、政之助の相手を見つけたと言うことだったのだ。

政之助を恨むなら、この相手を恨めということなのか。せつかく心持を落ち着けた濃紫にとっては余りに酷な出会いであった。

「喜市殿、この方は」

息が喉に詰まるようで、清次郎はそれだけ言うと、ごくりとつばを飲み込んで二人の女を見つめていた。

それ以上言えなかったわけではない。つい先ほど見せた、安らかで儂げな濃紫の笑顔が失われると思うと、このまま聞かぬほうがいいのかも知れぬとさえ思ったのだ。

濃紫以上に顔を蒼白にさせる清次郎を目の前にして、喜市は余裕ありげににやりと笑ってみせた。

「濃紫殿よ、あんたの記憶は間違いなかったようだ」

それが何事を指すか分からず、しかし二人の女が何者なのかには感じるものがあつたらしく、濃紫は眉間のしわを深めて怪訝な顔をしている。

その刹那、白髪交じりの女は草履も脱ぎきらずに座敷を膝で滑りながら濃紫へと近寄り、震える手を伸ばした。

濃紫は身を振りよけたが、女はそのまま倒れこみ濃紫を抱くように手を回した。

「一体なんじゃ」

もちろん触れられることなどない濃紫は、女の手をすり抜けるとついに声を荒げて喜市を睨んだ。

一体何のつもりなのかと、清次郎までもが喜市に問いかけようとした時である。

喜市は倒れこんだ女の手を取り起こすと

「濃紫よ、おっかさんにそれはねえよ」

と笑いながら口にした。

濃紫も清次郎も、混乱して声すら出なかった。

「どういふことか、説明をしてくれぬか」

ようやく搾り出すように言ったのは清次郎だった。

見れば、若い女は入り口で顔を覆って泣いている。母だというその女も、喜市の腕にすがり同じように嗚咽を上げていた。

「濃紫、あんたが旦那の相手だと思ったこの娘は、あんたの妹のつねだよ。こちらはあんたのおっかさんのきよさんだ。」

事の重大さにそぐわぬ明るい口ぶりで喜市が説明をしても、二人はまだ理解できないでいた。

母の丸まった背中をさすりながら、喜市は話を続けた。

「あんたの旦那は。征之助どのは、家族の無いあんたを不憫に思っ
てあんたがどこから売られてきたのか調べてたそうだ。

だがね、もしも家族がもう全員死んでた、なんてことになれば余計
にあんたを悲しませると思っ
て、教えなかったそうだよ。」

不意に、後ろにいたつねが涙を拭き喉をしゃくらせながら、口を開いた。

「旦那様は、こちらに住まないかと何度も使いをくださいました。
その度お断りしたのですが、なれば一度だけでも姉様にあってほし
いと、江戸に呼んでくださったのです。」

良く見れば姉に似た面差しのつねが話すにつれて、濃紫の顔がどん
どんと切ないような、穏やかなような顔になっていくのを、清次郎
は傍らで見つめていた。

濃紫はそんなことも気づかないように、つねの話に耳を傾けゆつと
りと座りなおした。

「しかし、江戸に来たのはいいんですが」

そこまで言って、うつむき言いよんだつねにすかさず喜市が言葉

を足す。

「あんたを売っちまったって背負いがある手前、やはり今更会いにいけなかったのさ、おっかさんがね。」

それで相模屋の旦那が江戸に引き止めて、二人を泊めている旅籠まで足を運んで説得していたのさ。

逢引をしていたわけじゃねえよ。」

笑いながら言う喜市とは正反対に、濃紫の母親は「すまなかった、すまなかった」と、壊れるんではないかと思うほどに泣いていた。濃紫はしばし呆然としてその様子を見つめると、まだ母の背中をさすってくれている喜市に向けて俄かに頬を緩め、泣いている母の上に覆いかぶさるように抱きしめる仕草をした。

「ありがとう、おっかさん。わっちは恨んでなんかありません。おっかさんも、つねも生きていて、それだけで全ては報われんした。」言いながら目を細めて微笑むと、目の端から涙が一筋静かに流れる。

「つねも、よくおっかさんを守ってくれんした。おおきくなりんしたなあ。」

流れるままの涙も拭かずつね手を伸ばすと、つねの方もすぐさまその手にしがみつくように体を寄せ、再び堰を切ったように泣きだした。

「清次郎殿。」

三人を慈しむように見つめていた清次郎に、喜市が小声で囁き、その鼻先で部屋の外を指し示す。

やっと自分の野暮さに気づいた清次郎は、音を立てぬように静かに部屋を後にした。

「今更ではあるが、後もう少しご家族がくるのが早ければ一緒に暮らせたやもしれんのにな」

喜市の部屋に腰を下ろし、火を入れたばかりの火鉢に手をかざし、清次郎は先ほど三人を見つめていた満足そうな顔はどこへ消えたのか、すっかり気落ちした様子で呟いた。

すると喜市は何か思い出したような含むような顔をしてにやりと微笑むと

「清次郎殿。小紫は成仏なんぞできぬぞ。」

といったずら小僧のような顔をして口角をにっと上げた。

数日後、二人は件の材木問屋の前にいた。

店先には、客を見送る若旦那の横でしつとりと微笑む女がいる。

「いやあ、まさか生霊だったとはね。」

頬張っていた団子を飲み込むと、喜市が笑った。

「しかし、倒れてきた材木に頭ぶつけてのされちまうなんて、そんなやわで材木問屋のご新造が勤まるのかねえ。」

そんな喜市の話を聞いて、清次郎も笑ってはいたが、その顔は優しくも寂しげだった。

どうやらあの後、目を覚ました濃紫は何も覚えていなかったらしい。しかし、「化けて出た」などと知れば本人も傷つくであろうからと、みなで黙っていることに決めたのだ。

花魁だったその女は「濃紫」ではなく、今は「おうの」という名前であるらしい。

陽の光の中で見るおうのはあの儚さが嘘のようにきびきび動き、ちよっかいを掛けてくる人足をさらりとあしらったりしている。

「それじゃ、帰るかね」

どちらとも無く言うと、二人はまたいつもの長屋に戻っていった。

「あら、いい香り」
材木問屋の奥方が言った。旦那はくん、と鼻をひくつかせると
「ああ、蠟梅か」
と微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4076k/>

蠟梅・

2010年10月9日18時10分発行